

Grape Check

01. 要旨

ADHD の症状がある人に向けたタスク管理システムの提案

02. 背景

経団連は SDGs の達成に向け、革新技术を最大限活用することにより経済発展と社会的課題の解決の両立するコンセプト「Society 5.0」を提案した。SDGs が目標の1つに掲げている「誰一人取り残されない世界」とは、「障がいを持っている人など、1人1人と向き合っていく世界」という意味合いを持つ。

近年、度々話題にあがる発達障がいとして ADHD が挙げられる。一般的に、ADHD は子供に多く見られるものだと思われがちだが、実際には大人の20人に1人が ADHD と言われており、私たちにとって ADHD は身近なものだと考えらる。また、ADHD 患者の約半数は大人になってから発症することもあり、自分が ADHD だと気づかずに過ごしている人も多々いる。

そこで、「次世代技術が支える働き方改革」の1つとして、障がいを持った人でもハンディを負うことなく働くためのサポートを行いたいと考えた。



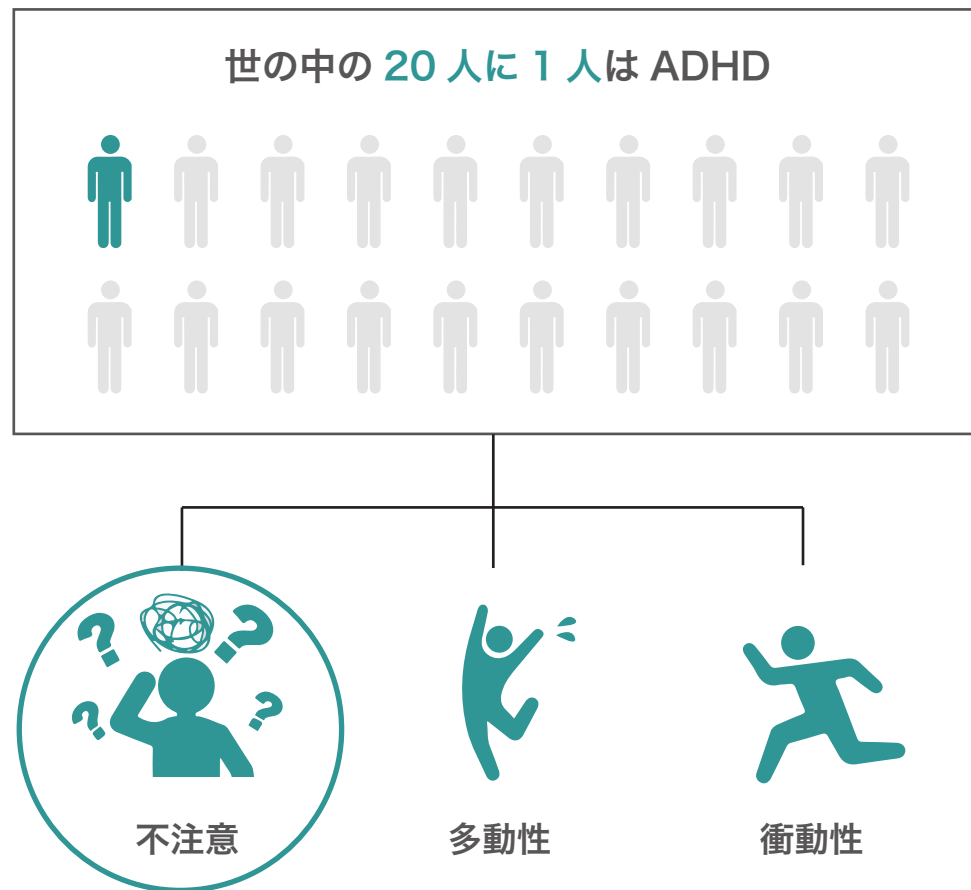
ADHD でも働きやすい社会を創ることが必要

03. ターゲット

- ADHD の中でも不注意優先型の人
- タスク管理が苦手な人

05. 提案

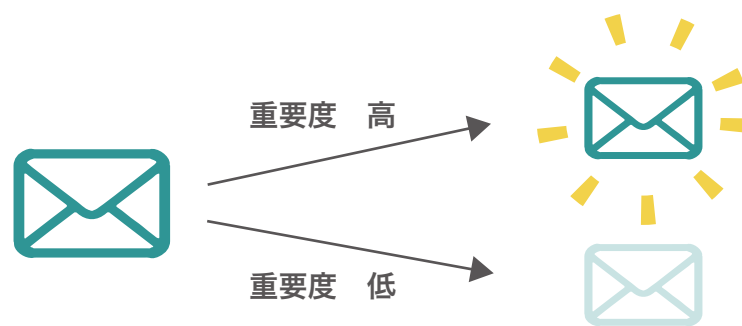
やることや抱えていることが多くなったときの対処法として、「1度書き出して見る」や「やることを順に並び替える」などが挙げられる。しかし、このようなタスクの整理を行うことが苦手な ADHD 患者は、重要なタスクを放置してしまうことが度々ある。このような課題を解決するため、発生したタスクや重要な用件の自動同可視化システムを提案する。



ADHD の特徴として、不注意（集中力が続かない、忘れっぽい）や、多動性（じっとしてられない）、衝動性（思ったことをすぐ行為に移す、順番を待てない）、の三つの要素が見られる。主に、多動や衝動性などの特徴が目立たない不注意優勢型、多動で衝動的な多動・衝動性優勢型、双方が現れる混合型の3種類に分けられる。

04. 目的

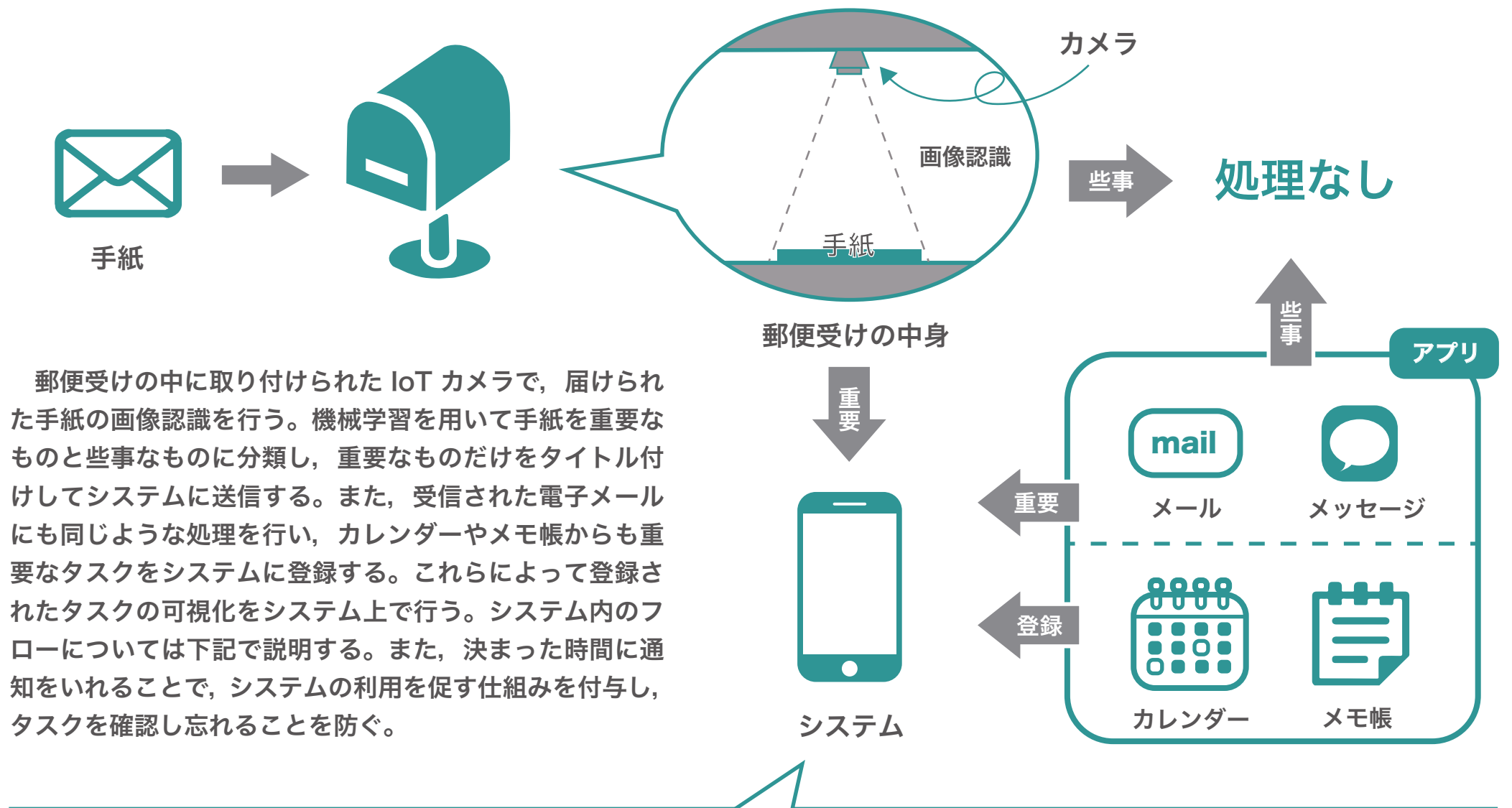
日々の業務や私生活で発生したタスクを一元化することで、タスク管理を容易に行えるようにする



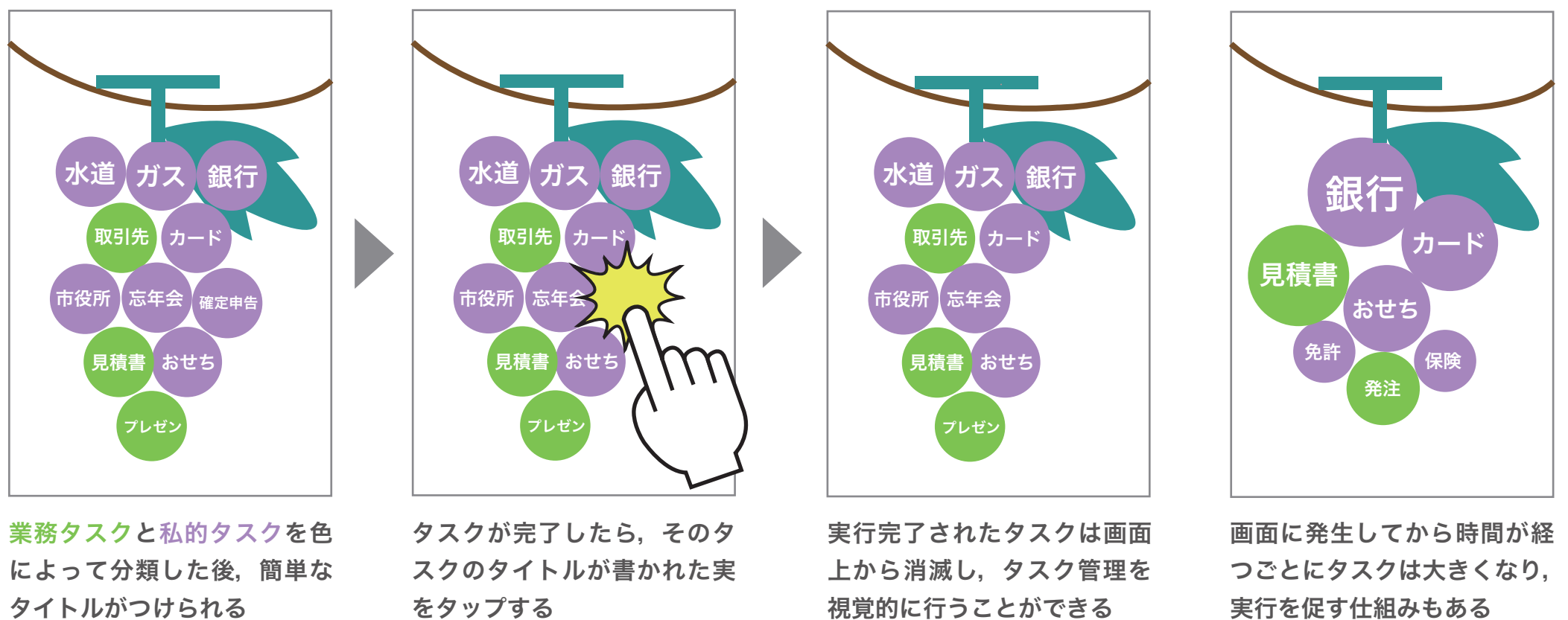
送られてきた手紙やメールを重要度で分類し、重要度の高いものだけを表示する

Grape Check

06. システムの詳細



郵便受けの中に取り付けられた IoT カメラで、届けられた手紙の画像認識を行う。機械学習を用いて手紙を重要なものと些事なものに分類し、重要なものだけをタイトル付けてシステムに送信する。また、受信された電子メールにも同じような処理を行い、カレンダーやメモ帳からも重要なタスクをシステムに登録する。これらによって登録されたタスクの可視化をシステム上で行う。システム内のフローについては下記で説明する。また、決まった時間に通知をいれることで、システムの利用を促す仕組みを付与し、タスクを確認し忘れることを防ぐ。



07. メリット

- 一元化したタスクを視覚化することで、タスク管理を容易に行うことができる
- 放置しているタスクの実行を促す仕組みを設けることで、タスクを実行し忘れることを防ぐことができる

08. 今後の展望

現在のシステムは、完了したタスクを手動で消去しなければならないので少し手間がかかるが、将来的にはウェアラブル端末やインプラントブル端末を身につけて IoT と関連させることで、自動で消去される仕組みを付与させたいと考えている。